

ジェンダー・トラック

-性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察-

中西祐子（お茶の水女子大学大学院）

1 問題の所在

本研究は、これまで扱われることの少なかった女子の進路分化メカニズムを考察するものである。その際、①男子／女子間（inter gender）の分化ではなく、女子の性内（intra gender）分化に、②進路規定要因として学業成績ではなく、「性役割観」に着目した。

女子の進路選択には、女性に伝統的に期待された「妻役割・母役割」と近年新たなオプションとして提示されるようになった「職業的役割」との葛藤が伴う。そこには「性役割観」という非メリトクラティックな要因が存在する。従って、女子の性内分化を学業成績というメリトクラティックな要因のみで説明することはできない。本研究は、学校が学業成績のみならず、性役割観という非メリトクラティックな要因に基づいた選抜・配分装置でもあることを明らかにすることを目的とする。

なお、実証研究は高等学校を対象に行った。100%近くの者が高等学校へ進学する現状は、高等学校が進路分化装置として重要であることを意味するからである。

2 分析枠組み

考察にあたり、進路分化装置としての学校、進路規定要因としての性役割観に着目した。先行研究は、学業成績に基づいて形成された、いわゆる「学校ランク」が、生徒の卒業後の進路を分化させるトラッキング・システムを形成していることを明らかにした（藤田1980、石戸1985など）。一方、この領域におけるジェンダーの視点の導入は、女子の進路決定に「性役割規範」が重要な役割を担っていることを示した（中山1985、天野1988）。

しかしこれまでの研究は、多くが女子を一枚岩的にとらたものであり、現実に「妻役割・母役割」への進路を選択する女子と「職業的役割」への進路を選択する女子の両者が存在することを論じてはいない。そこで、次の仮説をたて、両者の分化の説明を試みた。その仮説は「学校（高等学校）は性役割観に基づく独自の進路分化メカニズムを有しており、性役割観に基づき進路選択の

機会と範囲を制約するある種のトラッキング・システムを形成しているのではないか」である。

3 実証研究の対象と方法

仮説に基づき、以下の実証研究を行った。

対象：大都市圏の女子高校3校の3年生徒

（私立2校（A高校・B高校）、公立1校（C高校））

方法：質問紙調査（留置、集合調査）

時期：1992年7月上旬～中旬

調査対象校選定にあたり、次の3点に留意した。①学業成績レベルが同程度である、②性役割観の伝達において特徴的な学校文化を持つ、③系列大学を持たない。なお、研究の目的上、将来多様な進路選択のオプション（妻役割・母役割から職業的役割まで）が準備されている高校を選択した。その結果、成績上位校が調査の対象となった。

4 分析結果

分析はA高校とB高校の比較を中心に行い、C高校は比較の対象として位置づける。

(1) 学校組織の比較分析

学校は知識の伝達機関であり、進路に関する特定の知識も伝達される場である。各校で伝達される性役割観、進路に関する知識内容を分析した結果、A高校は「専門的職業婦人の養成校」B高校は「良妻賢母・教養婦人の養成校」としての特徴を持つことが分かった。なお、分析には学校要覧など各校作成の資料、ならびに市販の「受験ガイド」を用いた。

(2) 生徒の内面化する性役割観

A高校の生徒は伝統的な性役割観、性別役割分業を否定する傾向にあり、反対にB高校の生徒は肯定する傾向にある。さらに重要なことに、生徒の内面化している性役割観は学校が伝達する性役割観の知識内容と一致する。

(3) 生徒の進路展望

A高校の生徒は、従来「女性向きではない」とされてきた進路（医学部、定年まで継続して就業、家庭より職

業を優先したライフスタイル)を希望する者が多く、大学教育に道具的価値を求める。対してB高校の生徒は、従来「女性向き」とされてきた進路(人文科学系、中断再就職、職業より家庭を優先したライフスタイル)を希望する者が多く、大学教育に必ずしも道具的価値を求めているわけではない。以上の知見もまた、学校組織の伝達する進路の知識内容と一致する。

(4)進路の「矯正力」の存在

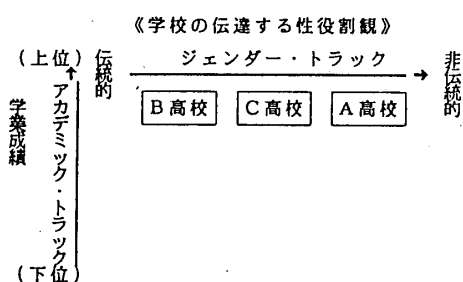
家庭での性役割の社会化経験を統制し、生徒の進路展望をみたところ、学校が特定の進路への「矯正力」を持つことが分かった。A高校では職業を優先するライフコースへの、B高校では育児、あるいは家庭を優先するライフコースへの「矯正力」である。このことは、いかなる生徒が入学してきても、学校が生徒を社会化・配分する方向が一定であることを示す。

5.考察

以上の知見により、先に設定した仮説は実証された。日本の高等学校は、学業成績のみならず、性役割観に基づいて生徒の進路展望を分化させるトラッキング・システムを形成している。このトラッキングは、ジェンダーに関わる進路分化メカニズムであることから、それを生み出す構造は「ジェンダー・トラック」と呼ぶにふさわしい。対して先行研究が扱ってきたものは、学業成績に基づくことから「アカデミック・トラック」と言えよう。実証研究は事前に学業成績レベルを統制した上で行った。従って、ここで実証されたジェンダー・トラックはアカデミック・トラックとは独立した進路分化メカニズムである。ジェンダー・トラックは、学業成績が同レベルの女子生徒をさらに分化させるのである。

アカデミック・トラックとジェンダー・トラックの異同は次のとおりである。①前者は学業成績を、後者は性

ジェンダー・トラックとアカデミック・トラック



役割観を用いた進路配分機能を持つ。②どちらも入学以前と入学以後の二段階選抜過程からなるが、前者は偏差値ランクの、後者はチャーターや学校文化の影響を受ける。③両者のもたらす障壁は、あくまでも心理的なもの(荻谷1988)であるが、前者が同質の目標に対するアスピレーションの序列を形成するのに対し、後者は質的に異なる目標に対するアスピレーションの並列を形成する。

女子の学業達成が必ずしも男子同様の進路を提供しないことは常々指摘されてきた(天野1988など)が、ジェンダー・トラックはその理由を説明するに有効な概念である。人々の進路選択の機会と範囲は、アカデミック・トラックとジェンダー・トラックの二重の制約を受けるのであり、結果的に性に応じて異なる進路が「選択されやすい」現状を生む。この意味において、男子もまたジェンダー・トラックの影響を受けていると言える。

このようなジェンダー・トラックはなぜ存在するのか。最後に、全体社会との関わりの中でジェンダー・トラックの意味を仮説的に考察しよう。アカデミック・トラックが「出身階層→学校ランク→将来の地位」という社会的トラッキング・システムを形成しているように、ジェンダー・トラックも出身階層と無縁ではない。ただし、この場合重要なのは母親の就業形態である。調査の結果、ジェンダー・トラックは「母親の就業形態→高校→将来の本人の就業形態」という社会的トラッキング・システムを形成している可能性が示唆できた。ジェンダー・トラックは女性のライフコースの再生産システムなのである。さらに、家庭内での女性の役割が階層的特性を持つ(天野1988, Duru-Bellat 1990など)以上、それは階層再生産の一端を担っているともいえる。

機能主義的観点に立てば、ジェンダー・トラックは真の能力に基づく競争を妨げ、人的資本の浪費をもたらす。しかし再生産論的観点に立つと、専業主婦になる女子に対する教育的投資も浪費ではない。学校教育は女子に矛盾した二つのメッセージを送る機関であることが知られている。A高校は業績主義的側面を、B高校は役割再生産の側面を強調する、全く異なる基盤の上に立つ学校なのである。ただし、両校生徒の社会経済的地位には大差がなく、そこには別の階層分類が関係すると思われる。